

---

# 風になる

刹音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風になる

### 【Nコード】

N17130

### 【作者名】

刹音

### 【あらすじ】

好きになるのは、昔からただ一人だった。他の人を好きになることなんてありえないこと、だったのに。  
そばにいるにつれて、分からなくなっていく本当の気持ち。結衣の心は、目は、誰を見ているのか。そして、結衣を待つ残酷な運命の結末とは？

## 序章 最後の願い

傷ついて、傷つけて。

私の人生ってなんだったのかな。

+++

ピッピッ……ピッピッ……ピッピッ……ピッピッ……  
……

病院の白い清潔感ある部屋に心電図の無機質な音が響く。

時間が経つにつれて弱々しくなる音を発するあの機械。何万回も何  
十万回も聞いて耳の奥にまでこびりついた無機質な音。あれが私の  
命が終わるときを正確に示してくれる。

ぼんやりと霧がかかった視界で辺りを見回していた結衣ゆいは、やがて  
諦めたように目を閉じた。

隣では結衣の母親である野咲真希のさきまことが林檎の皮をむいていた、無機質  
な音にまぎれて皮をむくときのシャリシャリとした音が心地よりり  
ズムとなって結衣の耳に届く。

病院じゃなくて家にいるみたい

久しぶりに聞いた、機械音以外のやわらかい音に結衣はここは病院

ではなく自宅のリビングのソファの上なのじゃないかと考えてしま  
う。

それ考えもあの音が耳に入れば脆く消え去ってしまおうが。

「結衣、大丈夫？どこか痛い？」

突然、真希が林檎の皮をむく手を止めて結衣の手を握った。何かを  
願いように強く。

数日前の担当医の藤岡先生と話した日からお母さんは少し心配し  
ぎになったかな。

こんなことじゃこれから先が少し心配だよ。

喋ることは負担がかかるからと藤岡先生に止められていた結衣は、  
真希の問いかけに大丈夫よと言う代わりに今できる最高の笑顔を真  
希に向けた。

本当は断続的に腹部に痛みが走っていた。しかし、それを伝えよう  
なんて思っていなかった。終わりが少しずつ近づいてきているとわ  
かっているのに、そんな親不孝なことを結衣はしたくなかった。

「・・・無理しないでね。体が良くなったら遊園地に行こうね」

声が少し震える真希の声。無理していることがばれられた。

お母さんも無理しないで。そう私の声で伝えられたらどんなに良い  
だろう。

震える声でも精一杯明るく言う真希に、結衣も笑ってうなずいた。  
そして、楽しみだねと伝えるために重たい腕を動かして片手を握っ

ている真希の手に置いた。

・・・体が良くなったら・・・ね。

結衣は全て知っていた。藤岡先生と話して帰ってきた真希の重たい表所を見たときから。

自分の命が尽きるのがそう遠くない未来であること。

それは変えることが出来ない運命であること。

そのことを結衣は理解して受け入れていた。

私が死んだとして、この大きな世界の何人が悲しんでくれるのかな。

そんなことを考えながら目をつぶる。

ズキリと、腹部に痛みが走った。

それを結衣はぐっと堪えた。近くにいる真希に悟られないために。

「結衣？苦しいの？痛いの？」

慌てたような真希の声が上から降ってくる。

痛みを隠しきれなかった結衣は自分を責めた。

大丈夫だよ。

真希に笑いかける。

偽りのものでも良い。とにかく笑顔を向ける。

心配をかけないというのが、私の最後の親孝行だから。

痛みは少しずつ激しくなっていく。それでも結衣は笑った。

絶対に心配はかけたくない。

最後のときまで笑っていたい。

『 悲しいときは泣けよ 』

突然懐かしい声が結衣の頭の中に響いてきた。

昔、何度も何度もこの声のある場所を強く望んでいたときのことを思い出して、寂しさに似た感情が胸を満たす。

悲しくはないんだよ。

頭の中に響いた懐かしい声に静かにそう反論する。

『 強がんなよっ！俺は転校してからずっとお前を見てきた。これでも・・・お前のこと分かってるつもりだよっ 』

次に響いてきたのは別の声。

私が酷く傷つけてしまった人。

泣きそうな顔が、壊れそうな顔が今も私の頭にちらついていてはなれてくれない。

ごめんね。

声の主の顔を想像して、心から謝る。

もう思い出さないと決めたのに、最後が近づくとなると少しだけ我俣になる。

会いたい。話したい。触れたい。

もう、叶わないこと。

笑顔を保っていた顔が少しだけ僅かに曇る。それを真希は見逃さなかった。

「ゆ・・・」

何かを口にしようとした真希の言葉は、病室のドアを開ける音と共に滑り込んできた看護婦さんの声によって遮られた。

「野咲さん。午前の面会の時間は過ぎましたよ」

その声には真希は慌てた様子で荷物の整理を済ますと、何も言わずに結衣の頭を優しくなでた。

真希の温かい体温が結衣に流れ込む。

真希が病室を去った後は、看護婦さんが優しく微笑みかけながらときばきと仕事をこなす姿をじっと見つめた。

点滴を替えたり、シーツを新しいのにしたり忙しそうにしていたが絶えず笑顔で喋らない私に向かって優しくいろんなことを話してくれた。

最後には真希がむききらなかつた林檎の皮を向いてくれた。

部屋には再度林檎をむく音が蘇る。

看護婦さんの優しい声がその音に重なり、緩やかな音楽を聞いているようだった。

そんな音を聞きながら、私は願った。

神様という幻に。

が、皆が、幸せになりますように。

結衣の小さな願いは小さな風になり静かに空気に溶けていった。

## 第一話 第一歩

期待と不安。

その他もろもろの感情を胸に抱いて、野咲結衣のさきゆういは立っていた。目の前には、ずっと前から目指していた那珂湊高校がある。

その高校を目の前にして、結衣は立ち止まってしまった。入学式のために飾られたフラワーカーチのトンネルを通って新しい生活への第一歩を踏み出したいのに、それができずにいた。

那珂湊高校に入学する他の生徒は、中に入ろうとせずに正門の前で立ち止まっている結衣を不思議そうに見つめながら次々にトンネルの中へを身を滑らしていく。

私も早く行かなくちゃ……。

そう思う心とは裏腹に、結衣の体はそこから動こうとしない。

新しい生活へ身をと投じるのを、そのための第一歩を踏みとどませているのは、期待と共に胸に潜む少しの不安。

不安な感情は小さいながらも、最大の威力を發揮して新しい生活を拒んでいた。

- ……大好きな中学校の友達と一緒ににはしゃいでいた頃に戻りたい。
- ……高校という未知の世界に、私の味方がいるのか怖い。

その感情が結衣の不安を生み出していた。

そしてそれは、動けずにいる結衣を不思議そうな目で見つめる視線が多くなればなるほど少しずつ蓄積されていった。



そのとき。

「おっはよっ結衣！なーにポケッツとしちゃってんの？」

明るく元気な声が頭に響いたかと思うと、いきなり首に腕を回されてギョツと抱きつかれた。

結衣は慌てて回された腕を解き、声の相手を確認した。

「美琉っ」

目を向けた先に立っていたのは、中学校の大親友である東宮美琉<sup>ひがしみやみる</sup>だった。

美琉は結衣に、ニツと笑うと視線を那珂湊高校へ移した。

「ここが那珂湊高校・・・私たちが通うことになる高校なんだね」  
「うん」

元気に言う美琉に、結衣は笑ってうなずいた。

「じゃ、行こっか！」

当たり前のように結衣の手を握り締めて、美琉はフラワーアーチのトンネルを通り抜けようと歩き出そうとした。  
しかし、やはり結衣は動くことができない。

「結衣？行かないの？」

動こうとしない結衣に、やや困惑しながら美琉はきいた。

どうやって答えようか思索している間、手を放して先に行くことだ

つてできたのに、美琉は結衣の手を握り締めたまま何も言わずにその場にとどまってくれた。

そんな美琉の誠実さに、誤魔化そうかと考えている自分がバカバカしいと思った結衣は今の不安を素直に口にした。

「なんだあ・・・そんなことかあ」

いい終わると、ホツとしたように美琉が笑った。

そして、不安をやわらいでくれるような優しい目で結衣を見つめた。

「不安を持つてるのは結衣だけじゃないよ。私だって不安だったもん。だから安心して・・・って、変だけど」

「美琉も？」

思わずきいてしまうと、美琉は笑ってうなずいた。

結衣の見る限りでは、美琉はいるもの美琉で、不安そうなところなど微塵も感じなかった。

「不安だったのはここに来る途中ね。体験入学で那珂湊高校は行ったけど、結局本当のところはさ入ってみないと本質なんて分からないからね」

だから不安だったの。

美琉は笑いながら小さく呟いた。

「でもね、結衣に会えたからもう不安じゃないよ」

少しだけ恥ずかしそうにゆっくりと美琉は言った。

「て、なんかこんなことというと恥ずかしいねっ」

あははは。とおどけてみせたあと、美琉は少し寂しそうに笑いながらも明るい口調できいてきた。

「結衣はまだ不安かなっ？」

不思議なことに、先ほどまで結衣の胸に潜んでいた不安はその姿を完全に隠してしまっていた。  
体も、足も軽い。

結衣の返答を待つ美琉の顔はずっと寂しそうな色をしていた。  
それを吹き飛ばすように、結衣は美琉に今日見せる一番の笑顔で答えた。

「ううん！美琉と話たら不安がどっかに行っちゃった」

寂しそうな顔が、ぱあぁあっと一気に明るくなった。  
その顔を見て、まるで百面相だなと結衣は苦笑した。

それから二人は手を繋ぎ直し、どちらともなくゆったりとした歩調で歩き出した。

こんなに近くにいたんだ。私の味方<sup>ともたち</sup>。不安になることなんてなかったんだね。

結衣は大好きな親友と歩きながら、新しい生活への第一歩を踏み出した。

## 第一話 第一歩（後書き）

これは、主人公である野咲結衣が入院する前のお話です。  
ここから少しずつお話は進んでいきます。

## 第二話 クラス割り

フラワーアートのトンネルを抜けると、右手側に人だかりができているのを見つけた。

「何だろ・・・あれ」

「んー。行ってみよ！」

美琉に手を引かれ、小走りで人だかりの方へ近づく。

人だかりの中心にあったのは緑色の掲示板だった。白い紙が張り出されている。

すでに小さくなった人ごみを掻き分けて掲示板の紙を見ると、それはクラス割りがかかれたものだった。

「1年生6組まであるんだね。高校つてすごい」

「だねー。多いね。私たちの中学3組までだったのに」

会話を交わしながら、結衣は目を右から左へ左から右へ行ったり来たりさせて自分の名前がどこにあるのかを探した。

野咲・・・野咲・・・野咲・・・あつた。

1年6組24番と書かれた右側に『野咲 結衣』とはっきり書かれていた。

私は6組か・・・。美琉は何組だろう？

チラリと隣にいる美琉の方を見ると、まさに名前を探しているところらしい。目がしきりに動いている。

「美琉、見つかった？」

「んーっ、待って！…えーと…あ、あった！！6組29番！」

「えっ」

美琉を見ていた目を、もう一度クラス割りの紙へと向ける。

『野咲 結衣』と書かれている5つ下に確かにあった。『東宮 美琉』の名前が。

そのことには美琉はまだ気づいていないらしい。先ほどと同じように目を動かして、結衣の名前を探し始めていた。

「私たち、一緒のクラスだよ！」

そう教えると、美琉はきよとした顔で結衣のほうを見た。

そしてすぐに掲示板のクラス割りへ視線を戻して6組に結衣の名前を探し始める。

一瞬の間をおいて、名前を見つけた美琉は周りにまだ人がいるにもかかわらず結衣に抱きついた。

「ちよ…っ」

「私たちまた一緒だよ！嬉しいっ」

自分の気持ちを直球に出して伝えてくれる美琉が結衣は大好きだった。喜びを表すときに抱きついてくる癖があるのは中学のときから知っていたことで慣れていたし、美琉のいい特徴の一つだと思っている。

だけど…

「あのね、人前はちょっと・恥ずかしいんだけど」  
「私は恥ずかしくないし、気にしないもーん」

お願い気にして……。

ガツクリと肩を落とす結衣とは対照的に、美琉は笑顔満面で結衣に抱きついて離れようとしない。

女の子同士で人前で抱きつかれるのは恥ずかしいものがあつた。もちろん男の子が相手に比べたら美琉に抱きつかれたほうが恥ずかしくないのかもしれないが。

「ね。美琉、教室行こう？クラス分かつたんだしさ」

「うんっ」

結衣が提案すると、美琉はすぐに頷き結衣を抱きしめていた腕を放した。

やっこのことで抱きつきから解放された結衣は、超がつくほどに御機嫌な美琉と肩を並べて教室へと向かい歩き出した。

「……あれは……」

そんな二人のうしろ姿を、一人の男子生徒が見つめていた。

+++

「わっ……6組に行つてないの私たちだけみたいだよ」

昇降口の自分の番号の靴箱に靴を入れようとした結衣は6組のほかの靴箱が埋まっているのを見て驚いた。急いで靴をしまい、上靴に履き替えると足早に1 - 6の教室を目指した。

教室の前に着くと、中から楽しそうな生徒の笑い声が聞こえてきた。結衣と美琉以外の全員が中で話しているのだから、騒がしくなるのも当然だ。

「なんか・・・入りにくいね」

「だねえ・・・」

二人して教室の前で立ち往生することになってしまった。

もちろんこのままでいるわけにはいかない。

どうしたものかと思案していると、突然ポンツと肩を叩かれた。

!?

慌てて振り向くと、そこには少し小柄な女性が立っていた。

ナチュラルメイクをして、真っ黒の綺麗な髪を肩まで伸ばし毛先を少ししまっている。清楚という言葉がぴったり当てはまるような女性だった。

「こんなところで何やってるんだ？」

優しい柔らかな声で、女性は言った。

めちやくちゃ男っばい口調で。

「えっと・・・私たちがクラスで最後なんですけど、なんか入りづら



くて・・・」

女性の見た目と喋り方にギャップがありすぎて、内心少し混乱しながらも答えた。

「じゃあ、一緒に入ろうか。私はこのクラスを担当する森浜沙紀もりはまさきだ。よろしく」

結衣や美琉がよろしくと返す間もなく、沙紀はさっさと教室のドアを開けた。

ガラリとドアの開く音に反応して、教室の中にいた生徒が一斉にドアの方に視線を向けた。

「皆おはよう。私はこのクラスを担当する森浜沙紀だ。よろしく」

数秒前の結衣や美琉同様、沙紀の見た目と話し方のギャップに驚いている人が何人かいた。中には口をあけてぼかんとしてる生徒までいる。

しかし、楽しい先生であることは沙紀のまとう雰囲気での場の誰もが感じていた。

「では入ろうか」

沙紀が、後ろを向いて言う。

「はい」

結衣と美琉は同時に答え、沙紀の後に続いて教室へと足を踏み入れた。

### 第三話 新しい友達

先生である沙紀と共に教室に入ったため、沙紀を見ていた視線は自然な流れで結衣と美琉に集まった。

やっぱり・・・恥ずかしいよぉ・・・

人から注目されることにまったくといって良いほど慣れていない結衣は少しだけうつむき加減に自分の出席番号の席を探し出しゆっくりと腰を下ろした。

「初めまして！」

結衣が座ったのを見計らったようなタイミングで隣から声をかけられた。

その声が自分に向けられたものだ気づいた結衣は慌てて隣の席を見た。

そこに座っていたのは、色素の薄い茶色の髪をポニーテールにした女子生徒だった。

髪は茶色だが、染めた感じではない。

地毛なのかなあ・・・？

まじまじと髪の色を見てしまっただけから、ハッとした。

髪なんかをじろじろと見てしまっただけは変な人だと思われてしまうかもしれないからだ。

そんな結衣の姿を見て、女子生徒はクスッと笑った。

眼鏡の奥の瞳が優しく微笑んでいる。

その瞳を見つめていた結衣の前に、女子生徒はためらいなく右手を差し出した。

「私、涼華りょうか！小宮涼華こみや。よろしくね」

「はい。私は野咲結衣です。こちらこそよろしくね」

差し出された手を右手で握り、握手をした。

なんか・・・結構幸良いかも・・・！

握手した手を離れたところで、沙紀が時計に目をやりながら立ち上がり、教室にいる生徒を見回していった。

「そろそろ入学式が始まる。皆、速やかに廊下に出て番号順に並んで。私語は慎むように」

「はい」

生徒たちはそれぞれ返事を返して教室から廊下へと移動する。結衣も涼華もその流れに続いた。

・・・あ、美琉！

廊下に出たところで、この教室に入ってから美琉と話していないことに気づいた。席は番号順になっていたから美琉の席は結衣の席の右斜め前だったのだが、涼華と話していたこともあり声をかけ忘れていた。

美琉には、放っておかれると拗ねてしまうところがある。拗ね方が小さな子供みたいで可愛いため中学校では人気があったのだが、機

嫌を取り戻すのに時間がかかってしまう。

美琉・・・拗ねてないかなあ。

心配に思いながら結衣は番号順に並ぶ。

皆が廊下に出ておおよその位置に並ぶと、沙紀は律儀に列を整列し始めた。

その合間に、結衣はチラリと後ろに視線を向ける。

もちろん後ろに並んでいるはずの美琉の様子を確認するためだ。

・・・あ。

美琉は拗ねてなどいない。

それどころか後ろに並んでいる結衣の知らない女子生徒と和気藹々と楽しそうに会話をしている。

私と同じように声をかけられたんだ・・・。

拗ねていないことにホツとする反面、美琉が自分の知らない子と楽しそうに話しているところを見ると、なにか苦しくなるような感覚に襲われた。

なんだろ・・・？

考えていたところで、前方から沙紀の声が飛んできた。

「そこ、後ろを見て列を崩さない。その後ろ二人、私語は慎む！」

注意されたことに気づいた結衣は、慌てて前に向き直り綺麗に列に並んだ。

私語を慎めと怒られたのは十中八九美琉たちだろう。

今頃は少し頬を膨らませながら前に向き直っているに違いない。

結衣はふう、と息をつきながら制服の上から心臓の辺りをさすった。  
妙な息苦しさは消えない。

「皆並んだな。それでは出発する」

沙紀の声と共に、綺麗に整列された生徒の列は動き始めた。

付きまとう息苦しさを感じないようにしながら、結衣は遅れないように列の流れに沿って歩いた。

……結衣。

美琉は前方で見え隠れしている結衣の背中をじっと見つめていた。

## 第四話 入学式？

一定のテンポで動いていた生徒の列は不意に止まり、結衣は危うく目の前にいる男子生徒の背中に自分の鼻をぶつけそうになった。

あ……つぶなかつたあ。

一人ホツとしてから、あたりを見渡す。

結衣の並ぶ列の前には沙紀がいて、その奥には結衣たちのクラス同様、綺麗に整列させられた1組から5組の生徒たちが入場のときを待っていた。

緊張のせいか、誰もが口を閉じていてやや俯きながら立っている。制服という正装に身を包んでいるせいか、それはどこか葬式を連想させた。

『 新入生、入場 』

ちょうどその時、体育館の中からエコーがかった男性の声が聞こえ、同時に大勢の拍手の音が響いてきた。

それを合図にして、1組からゆっくりと入場していく。

少しして、6組の入場となった。

保護者や、知らない大人たちの前を通るのやはり緊張する。しかし、結衣は決して下を向かずはまだ未発達な胸をしっかりと張り前を見て歩いた。

新入生が全員席につくと、壇上の上に一人の女性の先生が現れた。

『国歌斉唱。 新入生、起立』

司会の声が響く。

体育館に集まった生徒たちは操られた機械のように同時に立ち、指揮棒を持った女性とピアノを弾く伴奏者に合わせながら君が代を歌う

君が代は

千代に八千代に

細石の

巖となりて

苔のむすまで

結衣はこの歌が好きだった。

何百年も何千年も変わらないという誓いの歌。

変わらないことなどできないこの世界だからこそ、結衣はこの歌が好きになった。

22

歌い終わると、司会の男性が着席を呼びかける。立つときと同様に新入生は一斉に腰を下ろした。

『入学認定。 1年1組担当、小早川夏先生こはやかわ なつお願いします』

司会に呼ばれた夏は、席を立ちマイクの設置されている壇上に上がった。

手に持っていたファイルを広げ、一礼する。

「那珂湊高等学校入学を許可される者、201名。

1年1組、赤塚亮平あかつかりょうへい」

「はい」

名前を呼ばれた生徒は立ち上がり、礼をしてもう一度腰を下ろす。小学校の入学式は覚えてないから比べることはできないが、中学校の入学式に比べると、男子も女子も少し大人になっている気がする。といっても、知らない人ばかりなのだからそう感じるだけなのかもしれないけれど。

1組の人から順番に名前が呼ばれていく。

はじめは、どんな人がいるのだろうと気になって立つ生徒を眺めていた結衣だったが、1組の生徒が半分ほど呼ばれた頃になるとさすがに飽きてきた。

生徒を呼ぶ夏の声が、結衣の頭に潜む睡魔を呼び起こす。

だめ……入学式なのに……。

プルプルと頭を振って、眠気を追い出そうとするが眠気はそれに抗い活性化する。

……。

襲い掛かる睡魔に結衣は抵抗できなかつた。

まだ名前が呼ばれるのには時間があると油断していたのも原因の一つだ。

夏の声を聞きながら、結衣は夢というまどろみに入ってしまった。



## 第五話 入学式？

トン、トン。

？

『い、結衣』

肩を叩かれる感触と、自分を呼ぶ聞き覚えのある声に結衣は閉じていた目をゆつくりと開けた。

目に映るのは、制服に無を包んだたくさん生徒達のぼんやりとする頭で、今の状況を整理する。

……入学式っ

その答えに頭がたどり着くと同時に、結衣の隣の生徒の名前が呼ばれた。

「野咲結衣」

その生徒が座ると同時に、結衣の名前も読み上げられる。

エコーがかかったその声を聞いた結衣は慌てて立ち上がり、はい。と返事をして一礼してから座った。

……間一髪……。

助かったとほつとしながら、肩を叩かれた方を首を少しだけ回して確認する。

結衣の座っているパイプ椅子の斜め右後ろ。

そこにいたのは、やっぱり美琉だった。

美琉は結衣が後ろを伺っているのに気づくと、回りの先生達にはれないように小さくピースサインを送った。

やっぱり、起こしてくれたのは美琉なんだ。

『ありがとう』

小さくジャスチャーすると、美琉はにっこりと笑った。

それを確認した結衣は首を元に戻し、視線を前に戻した。

少しして、美琉の名前が読み上げられた。美琉は元気な声で返事をして座った。

1年1組から6組までの生徒の名前が読み上げられた。

「校長辞令」

最初の司会の人が、入学式の続きへと進める。

壇上の上に、50代半ばのおばさんが出てきた。

その人はマイクの前で一礼すると、キビキビとした声で話し始めた。

「本日新たに、206名の生徒を本校、那珂湊高等学校にお迎えすることが出来ますのは、教職員一同喜びとするところであり、皆さんを心から歓迎いたします」

・・・また寝ちゃいそう。

さすがに今からは最後まで寝ないようにようと、背筋を伸ばして校長の辞令を聞く姿勢をとった。

校長の辞令が終わると、来賓の言葉や祝電披露。在校生の言葉に新  
人生の誓いの言葉。

着々と入学式は進んでいった。

入場から約65分後、入学式は終盤へと向かい新入生の退場となっ  
た。

1組の生徒から担任の先生に連れられて体育館から退場していく。  
6組である結衣が退場したのは入場と同じく号令がかかってから2  
〜3分後だった。

体育館の出入り口を目指しながら、どの生徒も列を乱さないように  
ちやきちやき歩いていく。

眠気でふらつく足を気力で保ちながら、遅れないように歩き出した。

これで、私もこの学校の生徒なんだ。

歩くにつれてはつきりしていく意識の中で、結衣は小さくそう思っ  
た。

そんなことを思いながら、結衣はこれからの学校生活を思い描いた。  
楽しいこと、嬉しいこと、辛いこと、苦しいこと。

沢山のことがあると思うと、強い不安に襲われそうになる。

でも、私は一人じゃないから。

頑張って乗り越えていこう。

小さく心に決めながら、結衣は一人口元をほころばせた。

## 第六話 お喋りタイム？

体育館をあとにした生徒たちは、それぞれの担任に従い教室へと戻っていく。

結衣たち1 - 6の生徒も、沙紀の指示に従い。教室へと向かった。

自分の教室へ向かう途中、結衣はキョロキョロと校内を見回していた。

体験入学で中学生としてここへ来て校内と見たときと、ここの生徒として校内を見るのはどこか見方が違って見えた。

・・・あれ？

校内を見回していた目を何気なく窓の外に移した結衣の視界には数人の男子生徒が映っていた。

登校時に飾ってあったフラワーカーチを片付けているところを見ると、上級生らしい。

男子生徒は結衣に背中を向けて作業をしているため、顔はわからない。

だが、そのうちの一人のうしろ姿に見覚えがあった。

あの人は・・・？

見覚えのあるそのうしろ姿に、思わず立ち止まりもつとよく見たいと思ったが、動いていく列の流れの中でそれが出来るはずもない。もしかして・・・という、淡い期待を胸で膨らませながら結衣は列の流れとともに教室へと向かった。

教室へつくと、各自自分の席へと向かう。  
結衣もそんな人たちに習い自分の席へ近づいた。

あ。

そういえば、と結衣は自分の席から右斜め前にある席を確認した。  
ちょうど美琉が席に着こうとしているところだった。

「美琉！」

少しざわついてきた教室の中で結衣の声は小さく響き、美琉に届いた。

美琉はすぐにこちらを振り向いてくれた。

「何ー？」

突然呼ばれた美琉は目をしばたかせながら結衣に聞いた。

「ん。さっきはありがとうって言おうと思って」

自分の席に着きながら結衣はそう言った。

一応ジエスチャーで伝えたには伝えたのだが、しっかり伝わっているかわからないしお礼はしっかりと口で言った方が良いと思ったからだ。

それを聞いた美琉はふふっとおかしそうに笑った。

「お礼ならさっき言ってたじゃん」

「伝わってないかと・・・」

「伝わったよ。私には結衣への愛があるから」

自慢げに笑う美琉に、結衣は何言ってるのと突っ込みを入れた。そんな中学校と変わらない会話をしていると、2・6担当教師、森浜沙紀がプリントを数枚配りながら話し始めた。

「今分けているものは、前期の活動内容及おもな授業内容と校則です。しっかり目を通しておくように」

自分のところへ来たプリントを見ると、細かく行事や校則などが載っている。

うわぁ……。見る気しないよねー！

結衣は殆どの人がそうしているように読むフリをして読み終わったことにしたプリントをかばんの中にしまった。

それからは、沙紀が簡単に校則を説明したり一人ずつその場で自己紹介をしたりして時間が過ぎていった。

全てのやることが終わると、残りの時間はクラスの中での喋りの場となった。

他のクラスはどうか知らないが、沙紀曰く

「喋る場を作ること、打ち解け仲良くなりやすくなる。そうすることで団結力をつくっていく」

だそうだ。

「沙紀先生って、考え方読めないね。もっと厳しいなと思ったのに」  
「だよー」

結衣は机を少し前にずらして美琉に話しかけた。美琉も椅子を後ろ

に向けて結衣と話す姿勢をとる。  
そこへ…

「ゆーい！お話しよーよ」

「美琉ちゃん！喋ろっよお」

二人の女子生徒がいきなり話しかけてきた。

二人のうちの聞き覚えのある声へ・・・結衣は左へ美琉は前へと顔を向ける。

「あ、涼華ちゃん」

「琉意かあ」

結衣と美琉がその相手の名前を呟くのは同時だった。

琉意・・・？

聞き覚えのない名前に結衣は琉意と呼ばれた子の方を見た。その子を見るとき、視界の端で美琉を捕らえると、美琉もこちらの方に目を向けているようだった。

琉意と呼ばれた子は結衣がジッと見つめていることに動じる様子は無く、真っ向から見つめ返してきている。

この子の顔には見覚えがあった。

列に並んだときに美琉と一緒に話していた子だ。

頭がそのときの光景を思い出すと、かすかに胸が痛くなった。気がした。

ねえ、美琉。この子は誰？

そう結衣が聞こうとする前に質問してきたのは美琉だった。

「結衣、そのこ誰？」

美琉は少し警戒するように上目遣いに涼華を見ている。その目は初めて知らない人を見た子供を思わせたが、口調はどこか冷たかった。



## 第七話 お喋りタイム？

結衣にとってこの表情の美琉は初めてじゃなかった。

中学校でも度々見かけたことがある。

結衣が美琉の知らない人に話しかけているとき、決まって美琉はこの表情で相手を見ていた。

隙の無い、いつもの美琉からじゃ考えられないような冷たくて鋭い目。

ジッと、静かに監視をするような目。

「この子は」

慌てて紹介しようとした結衣に、大丈夫といって涼華は美琉に向かって笑いかけた。

「はじめまして。私は小宮涼華っていうの。よろしくね！」

そういつて、結衣のときと同じように右手を前へ差し出す。美琉はその手と涼華を交互に見つめたあと、満面の笑みを涼華に向け、差し出された手を握った。

「私は東宮美琉ひがみやみりゅうっていうのだー。こちらこそよろしくね、涼華ちゃん」

美琉も涼華も互いの手をしっかりと握って笑顔で握手をしていた。

『友達』が出来る瞬間はどうしてこう美しいって感じるのかな。人と人の心が触れ合う初めての瞬間だからなのかな。

考えても答えは出るわけもない。  
だが、結衣は二人の握手が解かれるまで、ずっとそんなことを考えていた。

握手が終わったあとも、新しい友達が出来たことのちょっとした幸せに二人は浸っていた。

結衣は、二人が仲良くなってくれてよかったとホッと息をつく。

さてと。美琉はこれで涼華ちゃんのことにはわかったよね。  
あとは……。

ちらりと、視線を上へと傾ける。

パチツ ……。

少しだけ顔を曇らせて考え事をしているふうな女生徒と目が合う。  
女生徒は結衣と目が会つと、何かを言いたそうに口を開けようとしては躊躇いがちに言葉を飲み込んでいた。

確か……琉意ちゃんだっけ。

記憶の中で、美琉が何と呼んでいたかを思い出す。

……確かに、琉意と呼んでいたはずだ。

「えと。琉意ちゃんていいのかな？」

女生徒……琉意は突然話しかけられてわたわたとしながらも、しつかりと頷いた。

先ほど目が合ったときに怖気づくことなくじっと見つめ返していた子だから美琉や涼華のようにハキハキとした性格だと思っていた。

だが、どうやら琉意は少し人見知りな子らしい。  
目を離さなかったのも、離していいのかこのままの方がいいのかわ  
からなかったのだろう。

「じゃあ、琉意ちゃん」

涼華と同じように結衣は右手を琉意へ差し出す。

「はじめまして。私は野咲結衣です。よければどうぞよろしくして  
あげてください」

優しくにつこり……と、笑うことが出来ればよかったが、結衣  
は頭で考えた表情をその通りに出すことが苦手だった。だからこそ、  
ごく普通の結衣としての表情を琉意に向けた。

不安そうにしていた琉意の顔は一変して明るく輝いた。

それでもまだ、戸惑いながらもゆっくりと結衣の手を握る。

「あ……私は、羽石琉意はししるいです。こちらこそよろしくお願ひしま  
す」

琉意の手は冷え性なのか冷たかった。結衣はそれをそっと握ってや  
わらかい握手をすると、先ほどよりも格段に琉意の表情がほころん  
だ。

「琉意ちゃんっていうんだね！聞いてたと思うけど改めて。私は涼  
華。こっちもよろしく！」

気さくにポンツと琉意の肩を叩く涼華。

誰とでも気さくに仲良く出来るのは、涼華の長所なのかもしれない。

「はいっ、涼華さんよろしくお願ひします・・・っ」

慌てて涼華を向き、深々とお辞儀をする琉意。

今いる場所は机と机の間の通路であり、それほど広い空間があるわけでもない。

「っっあ・・・っ」

バンツ

結衣たち三人の口から同じ言葉が漏れると同時に鈍い音があたりに響いた。

狭い通路で慌ててお辞儀した琉意の頭が結衣の机の角にぶつかったのだ。

## 第八話 お喋りタイム？

「る・・・琉意ちゃんっ、大丈夫!？」

結衣は慌てて慌てて椅子から降りて、蹲すくまった琉意に近づき、その頭を見る。

少し赤くなってはいるが、特に問題はなさそうだった。

「あ・・・はい。大丈夫です・・・」

黒い瞳に薄っすらと涙を滲ませながら頭を押さえ、問題が無いことを告げた。

盛大な音に反応してクラスメートたちがこちらを見てきたが、心配ないと気づくと自分が喋っていた友達との会話を再開する。

結衣たちの近くにいた人は、大丈夫?と声をかけてきてくれて、その度に琉意は笑って大丈夫と告げ、ついでに自己紹介をしたりと、何だかんだでクラスの半分以上の人と言葉を交わすことが出来た。

「よし。皆、しっかりと交流は出来たか？」

沙紀が前に出ると、生徒はすばやく席へと戻る。

生徒たちの顔を見回した沙紀は満足そうにならずいた。

それから、どこのクラスでもするような説明を淡々と話し、その日は下校となった。

入学式という、いつもとは違う雰囲気にもまれて無意識にわくわくとしているのか、時間が経つのが早い気がする。

「結衣」。かーえろー」

解散になった途端に、美琉は鞆片手に結衣の机までやってきた。その後ろには琉意もいる。

「そだね。帰ろっか」

「あ、結衣帰る？私も一緒に帰って良い？」

涼華も仕度を整えて結衣の隣へと立つ。良いかと聞いているわりに、涼華は遠慮した様子も無く美琉や琉意と喋りだし、結衣に絡んでくる。

最初から一緒に帰る気満々だったみたいだ。

もちろん結衣も断るわけ無く、四人で談笑しながら教室を後にした。

廊下でちらほらと見知らぬ生徒とすれ違いながら昇降口へ向かう。その間、涼華と琉意は今日始めてあったとは思えないくらいに仲良くなる事が出来、これからは呼び捨てで呼び合うことが決まった。

「んー！やつぱり外は良いね！式的时候はしっかりと姿勢を正してたから疲れちゃったよ」

昇降口から真つ先に外に出た涼華が伸びをしながら言った。確かに、高校の入学式というどこか厳しそうな雰囲気の中では誰もが疲れてしまうことだろう。

私もなんか疲れちゃったんだよね。

「私も疲れちゃった。やつぱり緊張しちゃうもん」

「その割には寝てたけどねえ」

苦笑交じりにそういうと、隣でそれを聞いていた美琉がニヤニヤと笑いながら突っ込みを入れる。  
本当のことだけに否定も出来ない……。

っていうか、何で言うかな美琉!?

「結衣は寝てたんですか」

「おー。やるう」

涼華と琉意に追い討ちをかけられ、ちよっとだけへこんでしまう。  
頬を膨らませて上目遣いに美琉を睨むと、すっごく嬉しそうに笑う美琉の顔が視界に飛び込んでくる。

その幸せそうな笑顔に、結衣は文句をいう気もそがれてしまった。  
美琉がそう笑ってくれることが、ただ嬉しく感じた。

「はぁ……なんか結衣と美琉はらぶらぶだよねえ」

まじまじと結衣たちを見ながら涼華が言った。

なななな何言ってるかな!

らぶらぶって!え、だってそりゃ、友達だし!

「当たり前だよー。私たちは愛し合ってるからー」

「おお!爆弾発言じゃん」

「美琉と結衣は恋人同士だったんだ……」

なんか話し進んでるし!

「違うからね!?!」

慌てて否定すると、美琉は残念そうに「ちえー」と頬を膨らまし、涼華は「んでは私かもーらいつ」と言って抱きついてくる。

「ちよ・・・っ」

それを間一髪でかわした結衣は、ダツと後ろ向きに走り。

ドンッ

「うわっ」

「とわぁっ」

背中から誰かとぶつかり、体制を崩した。

足がかくつと折れ、倒れそうになる。だが、倒れる直前に体を支えられた。美琉たちは心配そうに駆け寄ってくる姿が見えているから、支えてるのは他の誰か。

誰？

結衣は首をひねって自分の体を支えてくれている人物に視線を移した。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1713o/>

---

風になる

2011年7月28日23時05分発行